

ADVANレーシングタイヤインフォメーション

2009年 SUPER GTシリーズ第9戦

2009.11.8

MOTEGI GT 250km RACE



横浜ゴム(株)が「ADVAN」ブランドで、挑戦を重ねるカテゴリーのひとつ、SUPER GTシリーズ。2009年も全9戦で争われ、海外のサーキットも舞台とする日本の最高峰、かつ激しいバトルが繰り広げられるレースである。ADVANはGT500クラスに出場する、KONDO RACINGとのパートナーシップを継続。3年目のコンビとなるジョアオ・パオロ・デ・オリベイラと荒聖治が、HIS ADVAN KONDO GT-Rをドライブし、開幕戦を制覇。最終戦も制し、達成感のある締めくくりを目指す。

オートポリスで行われたシリーズ第8戦で、HIS ADVAN KONDO GT-Rは予選こそ決勝重視のセットで挑んでいたこともあり、11番手に留まってスーパーラップ進出はならず。しかし、決勝では荒がスタートでひとつ順位を上げたばかりか、その後も好調に周回を重ね、デ・オリベイラに6番手でバトンタッチ。全車がドライバー交代を済ますと5番手に浮上、さらに1台を攻略したばかりか、先行車にアクシデントが発生。その結果、3位でのゴールを果たすこととなった。



久しぶりに表彰台に上がったものの、ランキングトップとの差は大きく広がってしまい、チャンピオン獲得の希望は絶たれてしまった。それでもチームランキングで3位まで浮上する可能性は残っている。前回はタイヤの構造が改められたが、ストップ&ゴーが繰り返されるツインリンクもてぎが最終戦の舞台ということもあって元に戻されることに。さらにレース距離が通常より短い250kmで

あること、また温度が低くなるため、ソフト傾向のタイヤを投入する。抜きにくいコースであるため、決勝で好結果を得るには予選も重要。その予選はもてぎの名物となりつつあるノックダウン方式で行われる。

GT300クラスではフロントローをライバルに奪われたが、決勝ではその2台のペースが早々に鈍り、トップ争いが熾烈に。真っ先にトップを奪い取ったのはJIMGAINER ADVAN F430ながら、直後にGT500車両のアクシデントに巻き込まれてスピン。代わってUP START タイサンボルシェ、M7 MUTIARA MOTORS雨宮SGC7の順でトップに立つ。そして、全車がドライバー交代を済ませると、トップに躍り出ているのはウェッズスポーツIS350。序盤のコンスタントな周回と素早いピットワークが功を奏した格好だ。さらに2番手に着けていたのはJIMGAINER ADVAN F430! スピンはしたが、ダメージもなくロスも最小限に。直後にドライバー交代を行い、渋滞を避けられたことも挽回の要因だ。

ゴール間際にはウェッズスポーツIS350、JIMGAINER ADVAN F430によるトップ争いは、いっそう激しくなってテールトゥ・ノーズ状態に。残り10周を切った52周目、背後に迫ったGT500車両を巧みに利用し、JIMGAINER ADVAN F430がトップに躍り出る。その7周後、再逆転を狙ったウェッズスポーツIS350だったものの、無念のスピンを喫し、その脇をM7 MUTIARA MOTORS雨宮SGC7がすり抜けていった。その結果、ランキングトップをキープしたウェッズスポーツIS350の織戸学/片岡龍也組を筆頭に、今季初優勝を飾ったJIMGAINER ADVAN F430の田中哲也/平中克幸組を含め、ADVANユーザーでチャンピオンの権利を残したのは5チームに(条件、可能性などは裏面に)。

王座獲得のアシストのみならず、表彰台の独占も目指し、GT300クラスでも発熱性に優れたソフト傾向のタイヤが投入される。プレーキング勝負となるコースだけに縦方向のグリップは特に重視され、もちろん耐久性にも問題のないことはテストで確認済。ハッピーエンドのレースが期待される。



2009年 SUPER GTシリーズ第9戦用ADVANTイヤラインアップ

		GT500	GT300
ドライ用スリック	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (S, MS)	2種類 (SS, S)
	サイズ	Fr 330/710R18, Rr 330/710R17	280/710R18, 280/680R18, 280/650R18, 250/650R18
ウエット用レイン	構造	1種類	1種類
	コンパウンド	2種類 (S, MS)	2種類 (S, M)
	サイズ	Fr 330/710R18, Rr 330/710R17	280/710R18, 280/680R18, 280/650R18, 250/650R18



ADVANに、でっかいトロフィーを! GT300の王座は、俺たちが取り戻す

最終戦にGT300クラスのチャンピオン候補として挑むのは6チーム。そのうち5チームがADVANユーザーである。この最終戦の順位によって、各チームが到達できるポイントを下記に記した。なお、現時点で6位につける吉本大樹は、第1戦には出場しておらず、パートナーの加藤寛規を上回れないため、チャンピオンの可能性はないのだが、参考として記載した。

順位	セクセン	ドライバー	得点	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
1	19	織戸 学/片岡龍也	74	94	89	85	82	80	79	78	77	76	75
2	43	新田守男/高木真一	71	91	86	82	79	77	76	75	74	73	72
3	11	田中哲也/平中克幸	71	91	86	82	79	77	76	75	74	73	72
4	7	谷口信輝/折目 遼	67	87	82	78	75	73	72	71	70	69	68
5	2	加藤寛規	63	83	78	74	71	69	68	67	66	65	64
6	2	吉本大樹	58	78	73	69	66	64	63	62	61	60	59
7	46	星野一樹/柳田真孝	58	78	73	69	66	64	63	62	61	60	59

※43以外はADVANユーザー

目下ランキングのトップにつけるのは、RACING PROJECT BANDOHの織戸学/片岡龍也組。開幕戦での勝利を筆頭に、ここまでの8戦で一度もリタイアなく、コンスタントに入賞を重ねている。この安定感は、ライバルにとっては実際のポイント差以上に厄介に映っているはずだ。トラブルを抱えず、アクシデントに見舞われず。そのことはマシンの信頼性が高い上に、ドライバーふたりがレース運びに長けていることも示している。「ポイントリーダーとして最終戦に挑めるのは、すごく大きいと思う」と、強い自信をうかがわせるのは織戸。そして片岡も、「前は攻め続ける『坂東スタイル』を見せられたと思うので、あの勢いで最終戦も気を引き締めて、攻めていきたいと思います」と気合も十分。



もっとも、守りに入れない事情もある。それは2位、3位のチームとの差が3ポイントでしかないからだ。特に前回の優勝で勢いづく、JIM GAINERの田中哲也/平中克幸組は織戸たちが最も意識しているチームであるはず。田中組が4位以下であれば、織戸組はひとつ下の順位でも逃げ切れるが、3位以上であると上回らないと逆転を許す。

「再びノーハンデとなる最終戦が楽しみです。同じようにノーハンデだった開幕戦では哲也さんがポールを獲得してくれましたし、その頃よりもクルマは確実に進化しているので」と平中。そして、「クルマ的には得意でもないけど、苦手でもない。それより僕らには勢いがあるから、ウエイトがなければ連勝だって夢じゃない。特に雨が降れば! 昨年まで僕、300では3回勝っているんですけど、



そのうち2回がウエットだったんで」と、田中も勝算ありを公言した。

そして、「7ポイント差じゃ、まだ分からないね! できれば勝って決めたい。もてぎにセブンだと厳しいかもしれないけど、何が起ころともおかしくないのが、今のGTだからね」と、勝負権ありを述べるのはM7 RE雨宮レーシングの谷口信輝。パートナーの折目遼も「前は久々にタイヤ4本交換しましたが、それでも2位になれたし、僕も攻めることができました。大きかったですよね、あの結果は!」と意気揚々と語る。ここまで5回も表彰台に上がっているものの、優勝だけはなし。織戸組が3位以下という条件つきだが、今季初優勝でチャンピオン決定なら、喜びは二倍どころかそれ以上となるだろう。



一方、「厳しくなってしまったけど、とにかく最終戦では全力を尽くす」と語るのは、Cars Tokai Dream 28の加藤寛規。ここはトップから11ポイント差。そして、16ポイント差とあって、優勝が絶対条件の7位はTEAM NISHIZAWA MOLAの星野一樹/柳田真孝組。「数字的に可能性がある限り、諦めない」と星野が語れば、柳田も「ネバーギブアップの精神で。もてぎでは300の記録も持っているし、相性は悪くない」と。

今年はランキング上位陣の安定感、しぶとさが加藤組や星野組も含めて際立っており、波乱の展開がそう期待できないのは事実。だが、初めてノーハンデで行われる最終戦、全チームがすべての精力を注ぎ込む戦いは、そのセオリーが崩れる可能性も。ともあれ、悔いの残らぬレースを期待したいものである。そしてADVANユーザーによる、2年ぶりのチームタイトル、3年ぶりのドライバーズタイトル奪還も!

